

桂 信子

大正3年生

(草苑)



代表句とは自分の好みで決めるものではなく俳壇の声によつていつしか決まってしまう場合が多い。また代表句がその作者にとって最上の句というところとも限らない。同じようなレベルの句のなかに、その作者にとって忘れがたい句が自然に代表句になつてしまう場合もある。したがつて自分でこれが代表句だと限定して言うことにはためらいがあり後になつて変えることがあるかもしれない。

後藤比奈夫

大正6年生

(諷詠)

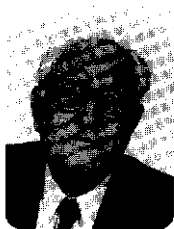


自分で自分の句を代表句だといって推す心臓は私にもない。でもその句が出来たとき、全身に痺れるような感動が走り、句会で高点が取れたような句は、将来代表句になるかも知れぬ。発表後、十年二十年と経つうち、何となく人々に好かれ、方々に採り上げられて、自然に人口に膾炙する俳句。そのようにして、代表句というのは知らぬうちに生まれてゆくもの、と私は思う。

成田千空

大正10年生

(萬緑)



代表句とは自分にとって忘れがたい俳句であり、人からも評価された俳句である。感動から発して、言葉が確かであれば、自分の俳句となり、人にも伝達されるはずだが、長い歳月の間に、類想の世界に埋没することもある。代表句として残るのは、特色と普遍性が一体化した、恵まれた句といってよいであろう。自分の代表句が俳句集の代表句となり得るかどうかはわからない。

大島民郎

大正10年生

(橡)



「代表句」とはその作者の顔となる句であろう。自分の顔は自分で判らぬもので、第三者の鑑賞、評価、斧鉞を得て、次第に代表句の地位が確立されてゆくものと思う。作者の個性が出ていて、新鮮且つ詩情に富み、しかも一度聞いたたら忘れ難いというおぼえ易さなどが必須要件であろうか。代表句といわれるわが作品は、すべて先師水原秋桜子及び畏友堀口星眠の推挽によるもので、深く感謝したい。

森田 峠

大正13年生

(かつらぎ)



高浜虚子の代表作の一つに「流れ行く大根の葉の早さかな」がある。大根の葉だけを詠み、写生の目で流れ行く早さをとらえている。虚子の主張する花鳥諷詠と客観写生とが実作の上で実証されているわけである。代表作とはこのようにその人の主義主張がよく現れていて、しかも世評の高いものを言うのだと思う。ただ単に秀作であるというだけでは代表作とは言えない。

八田木枯

大正14年生

(雷魚・晩紅)



いつであつたか飯島晴子さんと代表句について話し合っ

たことがある。「木枯さんの若い時代（昭和十年代から二十年代）はよかった。ホトトギスや馬酔木や天狼の巻頭を獲得すればその句は忽ち有名になり代表句の一つに数えられる。現在は一句を覚えていただくのに句集の三冊もだし、自信のある句はと問われれば馬鹿の一つ覚えのように同じ句を示す：」、そのようなことを言われた。昔がよかったとも思わないが、私も飯島さんの意見に同感だと頷いた。

藤田湘子

大正15年生

(鷹)



自分で自分の作品を「代表作」と呼ぶことは、なんとも痴おこがましい。せいぜい自信作ぐらいのところだろう。代表作かどうかは読者の側が決めるもので、それもかなりの時間をかけて繰りかえし評し論じられるうちに、おのずから固まっていくものだ。作者側はただ孜孜とおのれの作句に没頭していればいいのである。半世紀以上の作句歴のおかげで、たくさんの方々が私の句を拾って下さった。お蔭様で口の端にのぼる回数が多い句も見当がついている。そんな作品を掲げてみる。

山田みづえ

大正15年生

(木語)

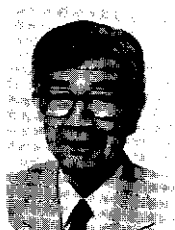


その作者の代表句は、十年以上経てもなお人口に膾炙され、しかも人と為^なりというか本^{ほん}性^{しやう}というか人柄が滲み出ていて、調子もよく、一句イコール作者像が、第三者やはじめて俳句をみた人に理解される作品をいうのかと思う。作者も読者も共鳴し得て、「うた」として心和むのがいい。

川崎展宏

昭和2年生

(貂・寒雷)



代表作とは、作り手にとっては、つまり、自分の好みの作ということであろう。好みは変わるかもしれないから、現時点での好みの作ということになるうか。現在、私は、句の切れによって一句の奥ゆきがひろがるような作を願っている。作り手は自分の好みに執するほかはない。整理の悪い私は、昔の句の初出をしらべるのが大変で、結局、近年の作が多くなった。

斎藤夏風

昭和6年生

(屋根)

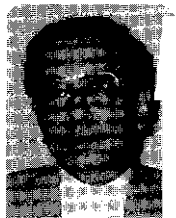


みずから代表作を掲げるといった趣味を私ももっていない。代表作を言うのは読手。作者ではない。ということ为前提に今回の注文に応じるとすると、私の場合、年代毎に対象と私自身の感性がびたり一つになって、特に季節的にも一分の隙もない程しっくりいったと感じた作品、又はそれに近い作が齢ごとにいくつかはある。匠がびったり木組を終えた時の感触とでも言おうか。結局授かりものといった感触のある句から五句を選んだ。

友岡子郷

昭和9年生

(椰子・柚・白露)



これが私の代表句です、などと自分で決められるものではない。文芸に限らず、およそ創作にかかわるどの分野においても、作品の良否はそれを受けとる人たちの価値判断に委ねられている。

とは言っても、大衆的評判のよかった句が、すなわちその人の代表句とは言えない。作者の側に愛念があり、かつ多くの人々の眼識を経て評価の定まった場合であろう。

矢島渚男

昭和10年生

(梟)



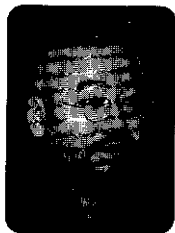
代表句というものの、人々の愛唱を受け、月日経て死後に生れることがもつとも望ましい。あるいは十分に他薦を経たものの中から自分らしさと新しさを兼ね持つ句として自薦できるのであれば、それもうれしい。

ただし「句は天下の人になゆる事はやすし。ひとりふたりにかなゆる事かたし」と芭蕉が言う「ひとりふたりの見者の目が欲しく、そのことは今日ではなかなか難しい。

中原道夫

昭和26年生

(銀化・沖)



作り手の思う代表句と読者側から見たそれとは、やや趣を異にするのが当然と思われる。ただ単純想起ということだけで言うなら、覚え易い口誦性第一の句になろうか。制作過程も定かではない、どちらかといえば机上作品が多い自作についていえば、愛着と他者に採りあげられる頻度^{フリクエンシー}とが上手く絡みあつて名ばかりながら代表句となつていようだ。言うなればもうそこに作者はいない抜け殻のことであるとも。